「'92のつどい」講演より

浄土真宗に出会った喜び

アグネス・妙珠・エンジェエスカ

精神的に成熟した多くの人々――つまりそのようなヨーロッパの伝統を打破し、自ら精神的なものを求める人々――にとって解決になりうるかもわかりません。その解決とはまさしく親鸞聖人の歩まれた道・み教えであると……。

（訳…石田法雄）

車にひかれた私

私は日本に在住して二年になりますが、浄土真宗に巡り会ったいきさつをよく尋ねられます。どのようにして、日本に、そして本日は奈良までやって来ることになったか、お話させていただきます。

私は、第二次世界大戦中、ヨーロッパ、ポーランドのカトリック（旧教）の家庭に生まれました。二十歳の時、医学部（メディカル・スクール）の二年生でしたが、車にひかれ重傷を負いました。ひかれた瞬間は覚えていないのですが、事故直後、正気にもどると、自分が体から離れていることに気がつきました。自分の体が道路に横たわり、周りには車と人々が見えました。私は思いました。「そこに自分の体がある。ということは、私は死んでいるんだ。私自身と私の体が同じだと考えていたなんて、なんと馬鹿だったんだろう」と。そこに横たわっている自分の体と助けを求めている人々を見ていました。

ある兵士が、私の財布を取り出し身分証明書を捜しました。救急車が大きな音をたててやってきました。私の体を救急車に入れようとした時、自分の体に戻らなければと気付き、そして再び気を失いました。病院では三日間私のために手厚い看護をしてくれ、結局三カ月入院しました。大学を一年間休学した後、故郷のワルシャワにある医学部に復学しました。

死についての専門家になろう

そこで神経病学と生命維持に特に興味をもち、大学院課程の神経病学の学生となりました。医学部の学位論文を書き上げ、脳と神経組織に関する神経病理学の教員免許を取得しました。

さらに、生きている状態と死んでいく過程を学びながら、大学院の別の課程を修得し、死に関しての医学上の専門家となる一般病理学の免許を得ました。その後、国際的分野で仕事を始め、勉学のためヨーロッパ、北アフリカ、中東、そしてアメリカ合衆国へと渡り、博士号を受けました。それにより、国際神経学会等に加わりましたが、個人的に興味を抱いていた問題に関して解答は得ることができませんでした。つまり、生命の基本的なことをまだ理解できていないことに気がつきました。

智慧を探し智慧を求めて

そうしているうちに、何がなんでも、どのような代償を払おうとも、自分が抱いている疑問に対して解答を得たいという衝動に、はっきりと、駆られるようになりました。何か間違ったことを今までしてきたという自覚がありました。しかし、何が間違っているのかが解りませんでした。ただ、自分が非常に限界のある人間であると感じました。すると、すぐに、心に浮かんでくるものがありました。必ず、ここから出られる道があるはずである。説明がつけられるはずである。私の限界を克服する手助けとなる、なんらかの「力 Power」があるに違いない。私は、この「力」を呼び求めるようになりました。名前も知らずそれについての何の知識もなく、ただ呼び求めていました。当時は、仏教についてはあまり知りませんでした。ただ「智慧」を探し、「智慧」を求めていました。この「智慧」とは形がなく、考えも及ばないものでしたが、その「力」が私のもとに届いていました。

それは、想像でもなく、夢でもなく、幻想でもありませんでした。ただ、形をもたない「力」を感じました。名づけることはできませんが、実感できるものであり、通じ合うことができました。この「力」は、しらずしらず、私の体を瞑想へと導いてくれました。「力」は、私の呼吸を整え呼吸に続くものでした。後には、自身をあたかも映画の中にいるかのように見たりしました。このように自分を客観視することにある驚きを感じたりしましたが、同時に自己の心の醜さも見え、恥ずかしさもおぼえました。しかし、それは私にとり本物でリアルな「教訓」でした。そこで、六週間休暇をとり、子供達を叔母のもとに預け、毎日坐り、私に与えられた「課題」をみつめました。

仕事に戻り、子供達を家に連れ帰る頃、私はすっかり変わっていました。以後、予期しなかった人々と出会うようになりました。私は、どんなことに対しても、信じやすいタイプの人間ではありません。何物も信じておらず、自分自身を含め誰をも信じてはいませんでした。宗教的な人間であるとは、全く認識していませんでした。ただ、与えられた「智慧」の体験に感銘を受け、再び、この「智慧」から離れることはないと確信していました。

はじめて仏教を学ぶ

そこで、国際神知学会（International Society of Theosophy）を知るにいたり、その会で仏教を学びました。しかし、私は自ら仏教を選ぶことはしませんでした。常に、私を導く「力」に身を任せていました。心の成長があると教えられていました。「瞑想している」と思ったことはなく、瞑想が自然に私の中で行われました。そ

れは、私が行っているものではなく、与えられたものでした。

ある日、医学部の代表としてモスクワと関係した共同作業でロシア語の翻訳者が必要となりました。やってきた翻訳者はポーランド人と結婚したばかりの若いロシア人女性でした。仕事で二、三度会った後、彼女は申し訳なさそうに、ポーランド語で書かれたテキストを読む手助けをして欲しいと頼んできました。それは彼女にとってとても大切なものであるということでしたが、チベットのラマによって書かれた人間の心に関するものでした。こうして私は仏教を学び始めました。十二年前のことです。

夜も昼も繰り返しお念仏

その二、三年の後、「南無阿弥陀佛」と称えながら阿弥陀仏について語るある人に出会いました。すぐに、それが私を導いてきた「師」である「力」の名前だとはっきり認識しました。喜びに満ちて昼も夜も繰り返し称えました。二、三週間後、ワルシャワの空港で本協会から派遣された三人の浄土真宗の僧侶に会いました。その頃空港の近くに住んでいたので、ホテルまで私の車でお連れしましたが、集会の場所を必要としておられたので、私のアパートを提供しました。そこで初めて「コー・ゲン・ギー・ギー」と始まる、『讃仏偈』を耳にしたのであります。

このような仏教との出会いがヨーロッパにおいては一般的なのだろうかと、お思いのことでしょう。いいえ、きわめて稀なことです。しかし、このような体験を持ち合わせるのは私一人ではないこともここに付け加えておきます。

ヨーロッパは数千年という長い歴史の上に成り立っていますが、それにより、いくつかの限定・制約を受けています。過去一千年においては、キリスト教の強い影響を受けてきました。違い過去においては、いい時期もありましたが、最近では、ファシズムとかコミュニズムの名のもとで行われた残酷な歴史もみられます。

「他力、名号を通して働きかける仏の本願力であります」'92のつどいで語りかけるエンジェスカさん

Saintに懐疑的なヨーロッパ人

それらの歴史をみるにつけ、ヨーロッパ人が今もっとも受け入れにくいことは、「とりあえず、何々を信じなさい」という「まず信じる」ことから始まる考え方です。ヨーロッパ人は日本人と違って、前例に倣うとか従うとかいうことを好みません。指導者を信じてはいません。彼らは幾度も、私たちを裏切り、私達の期待に反してきました。また、年功序列といった考えはありません。年輩者より子供達を大切にします。さらにいかなる権威者にも敬意を払いませんし、知識人は「聖者、聖人」といわれるのに対しては懐疑的な感情を抱きます。

おそらくこれは、人間の不完全性を認識しているからだと思われます。そして、新しい体験に対しては非常に批判的です。さらに、ヨーロッパ人は、アメリカ人のように人間とは素晴らしいものであるとは考えず、嫌なものだと思っています。またこの世界をパラダイスに変えられるのだと信じたりしていましたが、今まで何度も裏切られてきました。日本の皆様がヨーロッパ人から信頼を得るということは最も困難なことです。ヨーロッパでは無条件の信頼を得ることは、一般的にいっても、不可能のように思われます。

精神的な空虚をみたす教え

しかし、ヨーロッパ人の心の中には、このように精神的な空虚さがみうけられます。そこで仏教が、精神的に成熟した多くの人々――そのようなヨーロッパの伝統を打破し、自ら精神的なものを求める人々――にとっての解決になりうるかもわかりません。その解決とは、まさしく親鸞聖人の歩まれた道、み教えであると、私は信じています。浄土真宗が真の普遍的なみ教えであると理解しています。

しかし、問題はその伝道の方法にあります。ヨーロッパの人々は、仏教徒になろうとしても、教義には従おうとはしません。それは、実際のところは別として、彼らがヨーロッパの方が優れていると教えられているからです。哲学としての浄土真宗は、ある学者達にとって魅力的であるかもしれません。特に浄土真宗の教義の中にキリスト教の教義を認めさせるようなものを見いだすキリスト教徒達がそうでしょう。しかし、ヨーロッパで実際に受け入れられるためには、浄土真宗は哲学としてではなく、実践的に人生の向上をはかる「行」として紹介され、導入されるべきです。

とがめたり変えようとするのでなく

仏陀の教えは純粋なる慈悲の顕れであり、あらゆる人の個々の問題に答えるものです。仏陀の示すところによると、私達に問題が起きた場合、外の世界（周囲のもの）をとがめたり変えようとするのでなく、その問題を自分のものとして捉えなければならないということです。また、仏陀は、「相手が不完全だからといって、その人を変えようとしないこと。相手を変えることはできない、自分自身を変えなさい。それがあなたのなすべきことである」とおっしゃいました。

今のところ、ヨーロッパ人は自分達の考え方を変え仏教に学ぼうとしないかもしれませんが、徐々に個々の体験を通して学んでいくでしょう。

（次ページに続く）

阿弥陀仏によってなされた行

ヨーロッパには現在仏教センターがいくつかあります。それらは、最初から仏教の『行・修行』を導入したので、活発に活動が行われています。『行』を通して仏教についての理解が浸透していきます。さらに、『行』が個人の決定心を強めます。浄土真宗においても『行』というものがやはり最も強調されています。それは阿弥陀仏によってなされた『行』に成り立っていくものです。私達は『お名号』を通してそのなかに参加・参入(participation)させられていくのです。

誰もが求めている『幸せ』

現在のヨーロッパ人は一般に悟りとか、涅槃とか、仏果について考えようともしませんし、知識もあまり持ち合わせていません。実際、仏果を求めたりしません。しかし、洋の東西を問わず、どこでも、誰もが、『幸せ』を求めています。そもそも仏果を得ることが真の永遠なる『幸せ』を意味していると思います。この点から入っていくのがいいのかもわかりません。

仏陀は私達に『いま現在』においてこの生活・人生をいかにより良くするかを教えてくださいます。仏陀の教えを求める人は『いま現在』に生きています。仏陀の教えは未来のためだけではなく、『いま現在』のためにあるのです。どうぞ、このことに注目して下さい。難しい『空』のことを考えなくていいのです。阿弥陀仏とその名号に心を集中すればいいのです。

いつも如来様と一つ身である、いつもお六字と一緒！

幸せになりたいなら、幸せになるよう自分の心を集中してください。どうすれば自分を幸せにすることが出来るのかという世俗的な方法は考えないでください。ただ、ひたすらに幸せになりたいと願ってください。『幸せ』とは仏と一つになることです。この方法を見いだして下さい。『幸せ』になるために、仏と一つになるために、全ての自分のエネルギーをその願いに注ぎ、南無阿弥陀佛と称えてください。南無阿弥陀佛は、瞑想して坐っている時でも、寝ころがっている時でも、歩いている時でも、お皿を洗っている時でも称えられます。集中心と決定心が大切です。これがうまくいくと、人々は教えをさらに求め、学ぶようになるでしょう。

自動販売機ではありません

そこで、親鸞聖人の体験は広く、正しく受け入れられる方法で伝えられなければならないでしょう。例えば、英語で、『私は阿弥陀如来を信じ奉ります。そのとき往生が決定されるのです』などといいますと、これは阿弥陀仏を自動販売機に喩えているように聞こえます。つまり信仰というボタンを押すと、浄土に往生するということになるのでしょうか？　……そんなものではないと思います。

また、次のように言うとします。『私はどんな行も他の行は行わず、ただ報恩の思いだけで名号を称えます。』というのは、私の信仰が〈往生〉を意味するからです」と。英語でこのような説き方をすると、知的で感受性の高いヨーロッパ人はこの教えを、原始的で盲目的な信仰として扱うでしょう。

仏の心と触れ合う

親鸞聖人の体験に関して、わかりやすく正しい翻訳をするためには、言語的な問題と教育的な背景は別として、聖人と同じ精神に立つことが必要です。親鸞聖人の精神は信心の中においてのみ見いだせます。聖人における信心は英語で考えられる信仰(faith)ではありません。それは仏の心を念ずることで、仏の心に直接触れ合うのです。この厳粛な、独創的な、啓発的な体験の故に、疑うということがなくなるのです。信心とは体験的な『智』なのです。親鸞聖人における信心においては、信じる（信用する）というのではなく、わかるということなのです。このわかるということが常に私達の心を仏へと変えていくよう働きかけているのです。

人間の言語は、精神的で高尚な問題になると、それを厳密に描写することは困難になります。欧米の言語に比べて、日本語はその点さらに漠然としています。つまり、欧米の言語においては、ある単語の解釈はあまり曖昧な意味を含まず、ほぼ一定していて、信仰(faith)という単語にしても、柔軟な解釈はありません。信仰とは、常に、何かを或いは誰かを自ら信じる決心をする人の行動を意味します。時には、信仰とは与えられる何かであると（真宗における信心のように）主張するキリスト教神学者もいますが、これはその人達の任意的な解釈で、決して一般の認識とは関係がありません。キリスト教徒がその宗教的体験を表現しようとするときは、通常、『私はこの人生で主なる神に出会った』と言います。

世界的・普遍的な親鸞聖人

ところで、親鸞聖人は日本人ではありますが、信心の体験からいうと、世界的普遍的な人物といえます。念仏行を弾圧するよう命令した日本の当時の権力者達に断固反発しました。名号の力は国とか伝統を超えて働きかけています。親鸞聖人は伝統から飛び出し、天台宗の道場を去り、純粋で誠実な心で道を求められました。聖人は仏に救いを求め、観音様に導かれ、その指示に従われました。最終的に法然上人との出会いを通して、究極的な体験を得て、決定されたのでした。日本の封建的な中世に生きながら、聖人は伝統、権力、特定な規制などに縛られることなく、世俗の権威には屈服しませんでした。信心の体験を通して与えられた仏の心が聖人を解放したのでした。

聖人は智慧の体得者

聖人は『弟子一人ももたず』とおっしゃいました。これは、聖人が謙虚だったからというのではなく、智慧の体得者であったからです。仏教は従うとか信奉するとかいうものでなく、体験・体得するものです。仏になるためには、心の成長が必要で、この『成長』は私達の内面でなされるのです。救済とは、これに目覚めることなのです。

この新しく心が成長・生育していく側面は仏によってのみなされます。しかし、私達自身、また、それから学んでいくという側面も忘れてはなりません。

そのように学ぶためには、生きながらに体験していかなければなりません。死ぬことによって解決がつけられるという問題ではありません。死という問題は、たいていの場合、非常に混乱した困難な体験です。

古い自己中心的な考え方の死

浄土真宗の本質は信心で、肉体的な死を学ぶものではありません。信心とは、古い自己中心的な物の考え方の死と言えるでしょうし、仏を直接聞くことと言えるでしょう。「聞法」とは、書かれたり、語られたりしている全ての仏法を学習することではなく、直接に仏の声を聞くことが出来ることを意味しています。いま生きていてこのみ声を聞くことが、死の中にいてさえも仏に会うことを可能にさせるのです。信心の人にとっては、肉体的な死は第一義的に深刻なことではないのです。

浄土真宗は仏教そのもの

「浄土真宗の教えが私達の生活と心を変える」と言えば、間違っています。変えたりはしません。正確には、「信心が変える」のです。浄土真宗の教えは、ただ、信心獲得の可能性とその方法について教示してくださるだけです。私にとって、浄土真宗は特定な仏教ではなく、仏教そのものなのです。どの宗派にとっても、目的を達成するためには、ただ一つの行に限定することは必要なことです。仏果を得るには様々な道がありますが、ある場所にたどりつくには、それに応じた一つの道しかありません。浄土真宗では念仏行です。他力念仏は「非行―行でない行」と呼ばれています。といいますのは、行ずる力は私達のはからいではなく、他力、すなわち名号を通して働きかける仏の本願力であります。

信心を通して無明からの自由

しかし、これを行じている主体は私達であります。そうでなければ、或いは、私達の心が変わったり変化させられたりしていることを感じないならば、どこか間違っていることを意味します。浄土真宗を学ぶときは、まず名号を行じなければなりません。しかし、どのように念仏を行ずるかという規定された方法はありません。なぜかといえば、各々その人の業縁とか名号との出会いにより、それぞれ様々な状況下にあるからです。

自然とは、私にとって、法（ダルマ）を日常生活の中で受け取りそのまま理解することです。戒律にあるように、自己放棄するとか、何かを断たなければならないとか感じたりはしていません。可能な限り名号に心を集中させるだけで、自己放棄とか、自制する必要はありません。阿弥陀仏が慈悲深く私の基本的な問題・悩みの多くを拭い取ってくださるのです。自然とは、信心を通して業に縛られた無明から自然に自由になることです。

真のエゴ（我）など全くない

さて、法（ダルマ）を信仰の対象として信じるということと、信心体験で与えられた仏心を通して一瞬でも法がわかるということには大きな差があります。

私にとりまして、仏教には他力の行とか自力の行というものがありません。心が現に他力に触れられる瞬間まで自力の心の動向があるだけなのです。矛盾しているように聞こえるかもわかりませんが、真のエゴ（我）など全くないのですから、自力などないのです。

ただ、戒律のように、何かを断念するとか何かすることを自制することにより利益があると主張してきたことにより、不本意にも自力に大きな効用があるという印象を与えてきた歴史的な一面はあるようですが……。

さて、名号を称え、その称名から学んでいくことは、活動的で、生産的な生活であり、具体的な体験の世界であります。これは、特別な仏教ではなく、仏法の真髄そのものであります。私には、仏教の様々な宗派間の矛盾はありません。特別であると感じるのは、「分別」であります。仏法では、全ての分別された価値は幻影に過ぎないと説きます。しかし、いかなる教えでも私達の心の業報は変えることができません。もしできるならば、阿弥陀仏が私達のために行じられ、誓願をたてられる必要がなかったのです。

暴力の繰り返しの人類の歴史

ところで、ある教義・信条は、物事がうまくいっているときは深い感謝のうちに受け入れられます。しかし、うまくいかなかった時、さきほどまでその教義で善人ぶっていた人は人格を変え、武器をとって攻撃し合います。このように人類の歴史を通して暴力が繰り返されてきました。

仏の功徳・名号の功徳

また、良い教義・信条だけでは人の心を変えるのには十分ではありません。特別な行が必要です。業は教えを学ぶことによっては変えられず、行によってのみ変えられるのです。名号を行ずる人達には名号のなかで働きかけている仏の功徳があります。名号は絶えず働きかけてくださっています。

さらに、「浄土」の場所について悩む必要はありません。私達の浄土は信心によって導びかれます。

個々で独創的な心の架け橋

浄土真宗は個人一人一人の宗教です。「日本人は団体で行動を取り、個人とか個というものを表に出さない」と、一般的にいわれています。しかし、親鸞聖人はここ日本でお生まれになり、この日本で、聖人は純粋な誠実性でもって、私たちと仏との間に、個々独自の心の架け橋を建てられ、他力念仏の道を歩まれました。聖人は、今日のたいていの西洋人より、個人の成長と個性の発達という点で、はるかに進歩的であります。

また、この教えを今日まで伝え護ってこられた多くの日本の人達がいらっしゃいます。皆様一人一人がその尊い方です。

ありがとうございました。

南無阿彌陀佛。（文責・編集）

◆◆◆ 新刊 ◆◆◆

十字架から芬陀利華へ

ジャン・エラクル著
金児 慧 訳

スイスの念仏者 ジャン・エラクル師の南無阿弥陀仏との出遇いを語る　全三〇〇頁余

二、三〇〇円